

イトキリ蜻蛉



『ほんとだって、女と歩いてるの見たの』

何度目かの証言を聞いて、その朝私は浩介のスマホを調べる決心をした。

震える指を画面に滑らせると、大して苦勞もせずハートマークが飛び交ったメッセージを見つけることが出来た。

ああ、やっぱり。

私は手早く準備を済ませ、隣で寝ていた浩介に一瞥もくれず部屋を出る。

外はあてつけるように天気がいい。ゲリラ豪雨でも降ればいいのに。そんなことを考えながら、黙々と歩を進める。

街中に向かって歩く人々は楽しそうで、何だか急に死にたくなってきた。

失恋したらフテ寝をするのが一種の儀式だったが、朝っぱらから寝れるはずがない。

静まり返った自宅のソファに腰を下ろして、睡眠薬が入った箱をしげしげと眺める。

何錠飲んだら死ぬのだろうか。

ざらりとひと掴みの睡眠薬を、水で流し込む。死んだって構うものか。

薬が効いてくるまでの間、部屋に飾られた写真立てから浩介との写真を抜いて、びりびりに破く。浩介だけじゃない。何度写真を破いてきただろう。いつだって裏切られてばかり。私は都合のいい女なんだろうか。

幸せになりたかった。それだけなのに、何で上手くいかないんだろう。むしゃくしゃする。

その内とろりとした眠気が瞼を下してきた。その眠気に身を任せ、私は横たわる。

ぱちり、目が覚める。何だか眠れた気がしない。まだ空も明るいままだ。

身体を持ち上げると、予想していた頭の重みなどは感じなかった。身体が軽い。ベッドから降り立つと、妙なことに気付いた。まだベッドに私の身体がある。

規則正しい寝息をたてている自分の身体を見つめる。そして、それを見ている私自身の身体を見つめる。どちらも私だ。

恐る恐る身体に手を触れようと手を伸ばしたが、見えない壁があるかのようにそれ以上近づけなかった。ぶよぶよとした膜だ。どうしても戻れない。諦めてぱっと横を見ると、窓が開いていた。

窓の外に吸い込まれるように床を蹴ると、ふわりと身体が浮いた。まるで月面の上を歩いているかのように、身体が軽い。

窓から飛び出て、地上に向かってジャンプする。足は痛くない。

夢だろうか。それでも構わない。この現実から目を背けたかった。逃げたかった。

何処かの屋上やマンションのベランダ、看板の上を飛び回る。

建物が立ち並ぶ街中に来て、電柱の上から飛び降りる。それでも視線は刺さらない。

「早く戻らなくていいの」

声が聞こえた。最初は自分に向けられたものだとは思わなかった。だって私は見えていないのだから。

「ねえ君、赤い服の君」

自分が着ている服の色を思い出して、はっとした。声の方向を見ると、広場のベンチに座っている男の人が声をかけていた。

「リンクが途切れるよ。調子に乗らない方がいいんじゃないの」

「私が見えるの？」

彼は頷いた。目が見えないほど黒い前髪が伸びていて、かけている眼鏡が役割を果たしているのかは分からない。

「君、今幽体だから。あまり身体から離れない方がいいよ」

それだけ言って、彼はベンチから立ち上がり雑踏の中に消えようとする。慌てて背中を追いかける。

「待って！」

彼は応えない。人の波をまるですり抜けるように、ぐんぐんと前へ進んでしまう。彼の細い体は今にも飲み込まれて消えてしまいそうだ。足に力を入れ、地面を蹴りあげた。ふわりと身体が浮いて、上から彼を追いかける。心の中で謝罪をしながら、道行く人の頭を踏み台にして進む。

「お願い、リンクって何、私は今、どういう状態なの？ これは夢じゃないの？ 知っているなら教えて」

声をかけてきたのはそちらなのに、言いたいことだけ言って去るなんて酷いじゃないか。

「面倒だなあ、おれもそこまで暇じゃないんだけど」

男は立ち止まって振り返ったが、心底面倒くさそうにため息をつかれた。

「幽体離脱でしょ？ 身体に戻れば解決するって」

幽体離脱。何でもなしのように言われ、混乱する。

「私、幽体離脱してるの？ 何で？ 何で見えるの？ 何で分かるの？」

「質問多いなあ。リンクだよ」

先ほども耳にした言葉に、首を傾げる。

「実際の身体と、幽体を結んでいる糸のようなもの。今の君は、俗に言う幽体離脱状態なわけ」

「そのリンクが私にあるっていうの？」

思わず自分の身体を見回すが、そのようなものはない。

「まあ、自分では見つけづらいんじゃない」

彼は頭の上を指さした。思わず上を見上げるが、嫌味っただししい青い空があるだけだ。

「頭の上だよ」

そう言って、彼は横の店を指さした。休業中、と張り紙がしてあるガラスの壁に、私の姿が映っている。よく見ると、確かに頭の上から細い光の糸のようなものが生えていた。糸は家の方向にずっと長く伸びていて、空中にゆらゆらと漂っている。

「全然気付かなかった……」

「幽体が移動すれば抵抗なく伸び続けるからね。けれど、離れすぎると突然切れてしまう」

男の声を聞きながら、リンクの糸を指に絡める。触っている筈なのに、感触がない。ホログラムに手を翳しているみたいだ。

「リンクが切れたらどうなるの？」

「身体が死ぬ」

くっ、と喉で息が詰まった気がした。そもそも、今私が呼吸をしているのかすら定かではないが。

「さ、死にたくなかったら大人しく自分の身体に帰りなよ」

どうせ、半ば死のうとしていたんだ。このまま遠くへ行けば、楽に死ねるんじゃないか。そんな考えが頭をよぎる。

「何なら家まで送るよ。間違えて死なれたら面倒」

ついてこられたら此方こそ面倒だ。咄嗟に言葉を探す。

「あ、私、その、この状態になった時身体に戻ろうとしたんだけど、入れなかったの。透明な膜があるみたいで……」

「うわ、マジで？ 何処かに逃げたいとか、死にたいとか、そういう気持ちでいると入れないんだよ。君、もしかして自殺未遂か」

墓穴を掘ったようだ。彼は此方を睨んできたので、目を合わせられずに俯く。この人が何者かは分からないが、自殺に嫌悪感を抱いているのはひしひしと伝わってくる。

「仕方ないな……。ついてきて、おれの仕事見たら少しは気も変わるかもしれないし」

彼はそう言って手招きをする。

「仕事？ あなた、そもそも何者なの？」

「おれ？ 死神だよ。バイトだけど」

「は、死神？」

自称・死神の男は「そうだよ」と何でもないことのように言って地面を蹴った。彼の着ている黒いシャツがふわりと靡いて、身体が浮き上がる。そして、電信柱の上にゆっくりと足を下した

。

「死ぬ予定じゃない人が死ぬと、先輩に凄いとやされるんだよ。給料にも響くし」

私は「はあ」とも「うん」とも取れない微妙な音と共に息を吐き出した。

「別に信じなくてもいいけどさ、取り敢えずついてきてってば。君も飛べるだろ？」

彼はずり落ちた眼鏡を中指で押し上げる。世間で思い描かれているイメージとはかけ離れている死神の言葉に、私は取り敢えず従うことにした。地面を蹴り、彼と同じ高さまで飛び上がる。

「よし、じゃあ行こうか」

何処へ、と問う暇もなく、彼は直ぐに建物の上をびよんびよんと跳ね出す。慌てて追いかけるが、何をしようとしているのかは皆目見当が付かない。「あなた」と声をかけると、「クロって呼んで」と返ってきた。服が黒いからだろうか、安直な名だ。

「……クロ。死神って、何をするの？」

「君みたいな幽体を上に送るんだよ。まあ、君はまだ命が残ってるから駄目だけど。もう死んで

る奴ね」

クロは大きな通りの上まで来ると、ぴたりと止まって行き交う人の群れをじっと眺める。そして、「いた！」と声を上げて急降下する。その背を追いながら目を凝らすと、私と同じように頭の上からリンクの糸を生やしている男の人がいた。しかし、糸の色が違う。私のリンクの色は蛍光灯のような白い光だが、彼のものは青かった。

「やあ、どうも」

上から飛んできたクロを見て、その男性はぎょっとしたようにのけぞった。

「現世に未練たらたらみたいだね。でもちゃんと逝ってくれなきゃ困るんだ。さよなら！」

「待ってくれ！ 俺は」

ばつん

クロは男性の声に耳を貸さなかった。ポケットから取り出した鋏で、彼の頭の上で漂っていたリンクを切った。その瞬間、男性は光の粒子になって崩れ落ちた。その粒子を風が浚っていき、四方八方へ散っていく。勿論周囲の人は見える筈もなく、その後はただ騒がしい日常が広がっているだけだった。

「……死んだの？」

「もう死んでるよ。おれは上に送ってやっただけ」

クロは鋏をポケットにしまい、満足そうに空を見上げた。

「あの人、何か言いかけてた。何か、理由があるのかも」

「現世をうろついている幽体なんて皆そうだって。生き返りたいなんて言われても困るし、聞かない」

さて次だ。そう言ってクロはまた建物の上に飛び上がり、私もそれを追う。

街を上から見下ろしていると、人の頭がよく見える。リンクを見つけるには最適な方法なのだろう。クロはじっと下を見ているが、その長い前髪をかきわけようとはしなかった。そんな視界でよく見つけられるものだ。

かと思うと、ぴくりと肩を揺らしてまた地面へと飛び降りた。その方向に目を凝らすと、確かに細長い光の糸が揺らめいていた。その色は、やはり青い。

今度は追いかけず上から見ていると、リンクを生やした中年の女性がクロに縋っているのが見えた。しかし、クロはまたばつんと鋏を動かした。そして、ばらばらと光の粒子が散っていく。

彼はもう死んでるとは言っていたけれど、私にはクロが殺しているようにしか見えなかった。

「うん、いいペースだ」

クロは口元を緩ませながら、また上がってきた。

「青いリンクは死者の幽体なの？」

「そうだよ。死者のリンクは自分の身体じゃなくて、未練のあるものに繋がっている」

クロがその未練を断ち切ることで、幽体は消えてしまうのか。

「躊躇なく切るのね」

「幽体それぞれにいちいち同情しろっての？ そんな奴に死神なんて務まらないよ」

冷たいと思ったが、そう言えば彼はバイトとはいえ死神だった。人の形をしているが、人では

ないのだ。

視線を人々の頭の上に落とすと、ちらりと青い光が見えた気がした。

「あれ、」

教えてあげようと横を見ると、既にクロの姿はなかった。反応が早すぎる。

上から見ていると、少し様子がおかしいことに気付く。リンクを生やしているのは子供のようだったが、その子供をクロが抱き上げていた。どうやら泣いているその子をあやしているようだ。

「ほらどうしたの。泣かないで、おに一さんに教えてよ」

先ほどまでの振る舞いが嘘のように、腕の中で女の子を揺らしながら話しかけている。言っていることが違う。私は地上へと飛び降りて、彼の横に降り立つ。

「躊躇しないんじゃないの」

「君は血も涙もないな。小さい子が泣いているのに事情も聞かないっていいのか」

お前にだけは言われたくない。

「おかあさんに、おかあさんに会いたいの」

女の子はぐずりながら、クロに懇願するように抱き付いた。彼は「分かった」とあっさりとして承して、女の子のリンクを辿りだした。

「ちょっと、いいの？」

「こんな小さな子は自殺なんてしないし、あっちに行ってから賽の河原で苦労するから。最後の願いくらい叶えてやりたいじゃん」

どうやら彼は子供にとっても甘いようだ。対応が全く違う。ロリコンではないと思うが。

女の子を連れてリンクが続く先へ向かうと、リンクの糸はしゅるしゅると自然に収束し、絡まることは無かった。クロは抵抗なく伸びると言っていたが、伸びている場所へと戻る時もスムーズに縮んでいくようだ。

暫く飛び続けていると、住宅地に入った。彼女の家がこのへんにあるのかもしれない。

「いた！」

突然、女の子が叫んでクロの腕から飛び出した。忙しなく足を動かして、空中を走って行く。その先には、青いリンクが巻き付いた女性がいた。猫背でスーパーの袋を下げ、とぼとぼと歩いている。

「おかあさん！」

女の子は叫び、手を前を出して駆け寄る。すると、女性は弾かれたように振り向いた。聞こえる筈がないのに。

女の子は女性の胸の中に吸い込まれるように飛び込んでいった。そして、そのまま光の粒子となって身体が溶け出していく。粒子は散らばることなく、真っ直ぐに天に流れていく。

女性は目を見開いたまま空を見つめていたが、はっとしたように辺りを見回した。そして、ゆっくりとまた歩き出す。背筋は、先ほどより少し伸びていた。

「成仏したね」

クロは満足そうに眼鏡を押し上げた。

「本当は、成仏するのが一番なんだ」

クロは踵を返し、また街中へと戻り始めた。人がいる場所の方が幽体も多いのだろう。私もそれに倣って引き返す。しかし、途中で足が止まった。

「あ、」

知ってる顔だ。恋しくて、憎らしい顔。

咄嗟に手を伸ばしかけて、隣を見た瞬間縫い付けられたように動けなくなる。

可愛い女の子だった。私とは正反対の子。栗色のふわふわの髪、フリルのついたワンピース。楽しそうに話している浩介。腕を絡めて歩いている。

二人は私に気付くはずもなく、するりと目の前を歩き去っていく。

心に穴が空いたよう、とはよく言ったものだ。本当にばかりと空洞が出来たようで、すうすうと風通しが良い。けれど、悲しみが頬を濡らすことはなかった。

好きだった。

だけど、思っていたよりも好きではなかったのかもしれない。

「どうしたの」

立ち止まった私を不思議に思ったのだろう。クロが前から声をかけてきた。

「.....ごめんなさい。ちょっと知り合いがいたから」

視線で追ってしまうあたり、全く未練がないわけではないのだろうが。何故だろう、寧ろ吹っ切れたような、不思議な気分だった。

「へえ、彼氏？ 浮気でもされた？」

不気味なくらいずばりと言い当てられた。正確にはもう彼氏じゃないのだけれど。

「それに気づいて、今日の朝振ったばかりだった」

「ふうん、じゃあろくな男じゃないね」

眼鏡を中指で押し上げて、彼は辺りを見回した。そして、「ちょっと休憩しようか」と言って近くのベンチに腰を下ろした。隣をぽんぽんと叩いたので、私も腰を下ろす。

「あいつの浮気が分かって、自殺未遂？」

「.....何となく気付いたのはもっと前。確信したのが、今日。昔からろくでもない人ばかり好きになって、何度も裏切られて疲れたの」

「へえ、悲劇のヒロイン気取り？」

かっとして睨むと、クロは「ああ、悪口になるのかこれ」とあっけんからんとしていた。

「でもその割に、今は何かせいせいしてない？」

クロの問いかけに、唇を噛みしめる。

「.....涙が出ないし、そんなに悲しくない。一番長く待っていたから、もっと好きだと思ってた」

浩介だけじゃない。今までも、私はちゃんと人を好きになったことがあるんだろうか。

「そういうのムズいな、おれ好きとかよく分かんないからさ」

頭をわしわしと搔いて、彼は肩を竦めた。そういえば、彼に関する情報は〈死神のバイトをしている〉ということしかない。

私のことを話したんだから、あなたのことも教えてよ。そう言うと、彼は「君が勝手に話したくせに」とぼやきながらも話し出した。

「おれはさ、来世人間になるんだ。普段転生待ちの奴らがいるところで生活してる」

来世。死神という言葉のパンチには欠けるが、非現実的であることに変わりはない。

「前世は虫だったんだ、このまま直ぐ人間に転生すると上手く生きられないんだよ。だから、慣れるために一定期間人間として暮らしてみることになってんの」

「上手く生きられないって、どういうこと」

「人間として足りないものがあるんだって。思いやりとか、協調性とかそういうやつ？ 今のおれも不完全だから、死神のバイトは丁度いいって雇われたんだよ」

でも、君はそういうわけじゃないでしょ。

クロは口角を上げてにいと笑った。

「ちゃんと好きなのか分からないとかさ、甘えだよ。迷うってことは好きじゃない」

「.....よく分かんないって言った割に、確信を突くのね」

クロは声を上げて笑った。

「おれ自身は分かんないよ。客観的に分析してるだけだ。でもさ、何度も何度も裏切られて、それでも同じこと繰り返して。そんなに男を作りたいのも理由があるんでしょ？」

「.....私は、幸せになりたいだけ」

漠然としていて、確かな望み。幸せになりたいだけなのに、上手くいかない。

「焦ってるね」

そう言い切られて、目を見開いた。

「私、焦ってるの？」

「気付いてないの？ 直ぐ男とどうにかならうとするなんて、焦ってる以外の何物でもないじゃん。もっとゆっくり待てばいいのに」

私は焦っていたのか。そんなに好きじゃない男に直ぐ靡くほど。

「.....友達も、そんなこと言ってくれなかった」

いい性格の友達を持ってるね、とクロは笑ったけれど完全に皮肉だ。

「一人だと不安になるの」

「あのさあ、人間死ぬ時は一人だよ。今から不安がってどうすんの」

呆れた、と言わんばかりにため息をつかれる。

「ずっと一人でいるってこと？」

「はあ？ 何諦めてんの。おれは焦るなって言っただけで諦めろとは言っていない」

いちいち癪に障る言い方だ。

「まあ、君の命がまだ続いてることだけは確かだよ。生きてれば君みたいな人でも一度くらい幸せになれるんじゃない？ 振られ続けて疲れたとか、馬鹿みたいな理由で死ぬよりは余程いい」

好き勝手に貶してくれるものだ。けれど、その歯に衣着せぬ言い方が逆に清々しかったのは事実だ。直ぐにまた良い人が見つかるよ、なんて思ってもない事を言って、影では笑ってるような

女たちよりは遥かにまし。

常に男の隣に居たかったのは、見栄だったのかもしれない。

「どう、まだ死にたい？」

私はゆっくりと頭を振った。

「戻るわ。身体に」

気が変わらないように、とクロが部屋までついてきた。

いざ、と頭からリンクが生えている身体に近づこうとすると、ぶよんとした膜にまたぶつかった。

「入れないんだけど」

クロを睨むと、彼はどっかと床に胡坐をかいてにやにや此方を見ていた。

「やっばついてきて正解だった。一度生を諦めた人間が戻るには、これからどう生きるかっていう具体的なビジョンが必要なんだよ。君にはそれが足りない」

初耳だ。そんなこと、もっと前に言ってくればいいのか。私が唸りながら考えていると、クロは勝手にゴミ箱を漁って何かを取り出した。ぐちゃぐちゃに破り捨てた浩介の写真だ。そのままジグソーパズル宜しく繋ぎ合わせようとするので、「やめてよ」と制止する。

「こいつの顔も見たくない？」

「見たくない」

好きじゃなかった、悲しくもない、と自覚すると楽になった。

「その調子。大成功して見返してやりたいって思わない？ 過去の男も全員」

思う。焦っていた私にも責任はあるが、私の時間を奪っていった奴らも憎らしい。

「おれしか聞こえないし、思ってること全部言ってみなよ」

私はすう、と息を吸った。

「浩介の馬鹿！」

叫ぶと、溜まった毒素を吐き出すようですっきりした。

「浮気すんの早すぎるお前もさっさと振られろ！ 男運なさ過ぎて面白がって噂してるやつも嫌い！ 彼氏いないからって僻んでんじゃない！」

一気に捲し立てると、クロは床で笑い転げた。

「くよくよして焦ってた私も馬鹿！ 死のうと思った私も馬鹿！」

何らかの理由があって死んでしまったのであろう、今日見た男性や中年女性、女の子の姿を思い出す。

「生きてやる！ 幸せになってやる！」

自分で生を手離すなんて馬鹿らしい。まだ終わってやるもんか。明確なビジョンなんてないけれど、取り敢えず生きるしかない。前を向いて、焦らずに。

すると、ぶよぶよとした膜がぼちんと弾けて、抵抗が無くなった。叫びすぎて息を切らしながら、そっと近づいて寝ている自分の手を握る。すると、身体に触れたところから光の粒子にな

って体内に吸いこまれていく。

「は一面白かった、涙が出たよ」

クロは前髪を掻き分け、眼鏡をずらしてから目の辺りを拭いた。ずっと隠されていた目は常人より眼球が大きく、ぎよろりぎよろりと動いていた。複数ある玉虫色の瞳が口を開けている私を映し、クロは慌てて髪で隠した。

「ごめん、見えた？ 不完全なのは身体もでき、人間に成りきれてないんだよね」

もう今更何があっても驚くまい。

「前髪長いのに何で目がいいのか、分かった気がする」

眼鏡が必要なのかどうかは未だに分からないけれど。

その間にも、私の幽体はさらさらと崩れて、生身の身体の中へ流れ込んでいく。痛くはない。クロに切られたあの人たちも、痛みを感じていないといいけど。

「それじゃあお別れだ、起きたらきっと全て忘れてる」

肩まで光の粒子となった。最後に握手でもしようかと思ったけど、それは出来ないらしい。

「取り敢えず生きてみるわ」

クロは笑って頷いた。

「君の終わりが来たら、おれが切ってあげるよ。それまで、」

せいぜい足掻きな 幸せになるために

口が粒子になっていなければ、何様のつもりだと言ってやったのに。

ゆるゆると目を開いた。頭が重い、少し気持ち悪い。

私は生きていた。死に損なった。睡眠薬ではそんなに簡単に死ねないのかもしれない。

ふとテーブルを見ると、捨てたはずの浩介の写真が一部繋ぎ合わされて置いてあった。「うわ」と声を上げてしまう。無意識のうちにやったんだろうか、気持ち悪い。

そこではっとする。未練がもう無かった。頭は重くて体はだるいのに、何故だか心はすっきりしていた。

「あ、蜻蛉」

いつの間に入ったのだろう。季節外れの蜻蛉がぐるりと部屋を一周して、開け放たれた窓から外へ出て行った。